

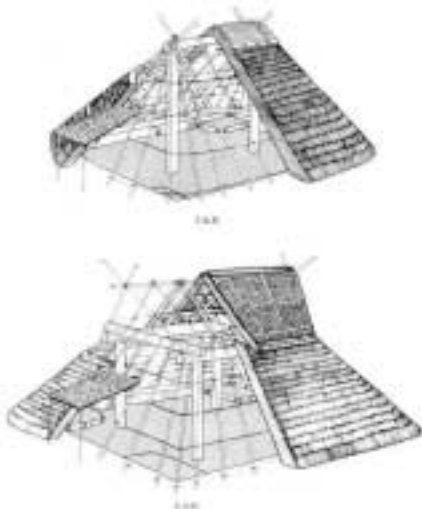
弥生時代の住まい「元祖工コ住宅」

弥生時代の家は、地面を掘りくぼめて、その床に数ヶ所穴を掘って柱をたて、木材などで骨組みをつくり、屋根に茅などを被せた構造の「竪穴式住居」になります(図1)。縄文時代から平安時代ごろまで続く最も一般的な家のスタイルです。

竪穴式住居は一見住みにくそうに思えますが、地面の中は熱が伝わりにくく、深いところほど温度が一定になり外の気温に左右されません。そのため、夏は涼しく冬は暖かく過ごすことができたと考えられています。

竪穴式住居の中には、火をたいて料理をするほか、暖房・湿気とり・明かりの役割も果たしたとされる炉(いろり)や、食糧などを蓄える貯蔵穴があります(写真1)。また、壁際の床を高くしたベッドのような設備がある家もあります。

時代や地域によって形も大きさも様々ですが、地域の風土にあった工



(図1) 竪穴式住居の断面(上部: 竪穴式による、下部: 竪穴式による)

法や材料を用途に応じて巧みに使い分けています。このように自然の厳しさや恵みから見出された知恵や工夫をもとに環境に適した「住まいづくり」を行っていることは、現代の環境に配慮した住宅づくりに通じるものがありますね。では、宮山遺跡の場合を見てみましょう。



(写真1) 1号住居跡は4本柱で中央に炉、南西側と東側に貯蔵穴があります

今回の調査では主に約1、800年前の弥生時代後期の竪穴式住居が合計26軒見つかりました。数軒重なりあつて見つけた住居もあるので、全てが同じ時期に建てた訳ではないようです。また、住居は阿蘇西小学校のプールや校舎側に向かって集中していますので、集落の中心部は調査地の東側にあるものと考えられます。

竪穴式住居は現代でいう約10畳のワンルーム程の広さになります。通常、住居の床は土間のように固くなっていますが、宮山遺跡では固い床がほとんどありませんでした。もしかしたらムシロのようなものを敷いていたのかもしれない。

さて、木材などは長い年月が経つと腐れてしまい最後には土になってしまいます。そのままの状態で見られることはなかなかありませんが、宮山遺跡一帯は水分を多く含む土質のため保存の条件が良く、色々な発見がありました。

特に約1、700年前の古墳時代の竪穴式住居(5号住居)からは大量の木材が見つかっています(写真2)。中央の井型のは梁(柱の上に渡す横木)、複数の細い丸木などは垂木(屋根や軒を構成する部材)



(写真2) 炭となった木材がたくさん発見された5号住居跡

と考えられ、当時の竪穴式住居の構造を検討する上で貴重な発見となりました。火災により焼け落ちて埋まったものと考えられますが家の中に生活用具などが残されていませんので、単に火災にあったのではなく、建て直しや引越しの時にワザと家を壊して火をつける風習があったのではないかと思われれます。

最初に述べたとおり、弥生時代や古墳時代においては壁や柱など用途に応じて木の種類の使い分けをしていることが多いのですが、出土した木炭を分析した結果、90%以上がクリで、それも相当の太木であったことが分かりました。伐採後のクリは柔らかくて加工しやすく、乾燥すると堅くて弾力性のある性質に変化するため、主に縄文時代に建築材として利用されている例が多いのですが、5号住居は古来の伝統を引き継いだ住まいだったのでしょうか・・・?

また、宮山遺跡の住居群の特徴として、住居の壁際に拳入の石を積み、ベンガラ(阿蘇黄土を焼いてつくる赤い顔料)を撒いている跡や、家を壊した後に要らなくなった土器などを大量に捨ててベンガラを撒いている例もありました。これらは住んできた家を壊したり、建て直す時に何らかの儀式をした跡ではないかと考えられます。火を噴く活火山「阿蘇」を始め、自然の神々に祈りを捧げ、この地での生活の安泰を願ったのではないのでしょうか。まさに自然を敬い、自然と共生する日本古来の文化のあらわれといえます。